

はるけき憶い出と

せつなるねがい

浅山英一

夏になると子供のころの水のあそび、泥んこのあそびがたのしく想い出されてくる。

暑いから水や涼しさなどが日常の生活やあそびの友達となつてくるのだが、私は幼年の時代を越前の敦賀で過したので、水や土にあまり恵まれていない大都会の子供たちの想い出などは到底想像もつかない。

敦賀の町は到るところに清水が湧いていて掘抜井戸はどこの家にもつくられていた。冬はあたたかく、夏は冷たい水が間断なくわき流れていた。あふれる水はブリキ製の樋から流れ出し、溜りには牛乳びんや何かが冷やされていた。街の駄菓子屋の店先では掘抜の水の中に葛まんじゅうが行儀よく並んでいてお客の来るを待っていた。私は今でももしそのような店があったら買ってみたいと思う。

駄菓子屋の掘抜水には子供のほしがるラムネやミカン水が

冷やしてあったし、別のコーナーには水鉄砲やメノコの類、ハマグリの貝がらにつめた三色の飴などが売られていた。小学校で夏休みがはじまると、駄菓子屋の店先はふだんより子供の数が多くなって喚声があがったり、女の子の泣き声などが夕方までつづいた。

また店の軒下にはバケツが下っていて、サイフォンを利用した玩具があった。水が噴水となって、ブリキの羽車を回転させると、その効力はとりつけた福助人形がブリキの太鼓を叩く仕掛であった。この福助もブリキ飯を打ち抜いたものであやしげな塗料で色づけしてあった。バケツの水がなくなるまで福助人形は顔に汗ならぬ水しぶきを滴らせながら金の太鼓をテケテケと叩いていた。買っても錆びて一夏ともたない玩具ではあったが、今そんな玩具はどこデパートへ行っても見かけたことがない。

また、水写真というおもしろい写真があった。たね紙という印画紙にうすい桃色の紙をあてがって水で濡せば即席に現像できて、どこかの街の景色などがおぼろげにあらわれた。今でも私は、写真のプリントを見るとき、どこか頭の隅でその水写真のことを思い出すのだが、どんな仕掛でその印画が

できあがったのか見当もつかないし、それをさがしてみようとも思わない。その水写真は私の臉にしっかり焼きつけられているからである。

そんな五、六歳のころ、私の家は氣比神宮に近いところにある、庭はソメイヨシノが幾本も二階の屋根までとどいていた。屋根根に出て摘んで花房を母は塩漬にしておき、夏にはお茶代りに出してくれた。今、どこかの結婚披露宴でサクラ湯が出る私の眼にはそのころのサクラと亡き母の面影とが二重の映像となって浮び上ってくる。

ボタンの花に顔をつつこんで、目も鼻も花粉にまみれた私を見て母は笑いこけていたことも忘れられない。

ムクゲの垣根で近所の女の子とゴザをしいてままごとをしたとき、ムクゲの葉を水でもみ、絞り汁をビンにつめて油屋さんごっこもよくやった。

夏は日蔭に床下から吹き抜けてくる涼風が吹き、そのあたりをよくみると乾いた土が小さなすり鉢のように凹んでいてアリが落ちて吸いこまれてゆくのをみたりした。

そのころに庭で見たチューリップの花が、真黒であったのは強い印象で残っているが、大正の七、八年ころに既に黒チ

ューリップがあったのだと、専門学校で花卉園芸を専攻はじめたころになっておもしろい出しておどろいた。

コデマリは物置小屋のかたわらで滝のように白く垂れて咲き、父が裏の畑にまいたダイコンに黒い虫が一ぱいに這って葉をすっかり網の目のようにしてしまったことなど、子供のころのあそびの中に、花あり、虫ありといった幼年のころを併せであったと思うようになっていく。

また、その頃の私には何故か紙を大切なものとおもいこむ癖があり、帳簿の断ち落しの紙をどこかでたくさん貰ってき、画や字をかいて遊び、それを捨てないで糸でとじてしまっておいたりしたのを覚えている。

今にしておもえば六〇年も前のこと、過ぎた年月ははるけくも長くかつおどろくほど短かかったと思われるが、いまだに画を描くあそびは忘れられないし、字を書いてそれを一冊にまとめる癖は死ぬまでなおりそうもない。

大人は、今の自分を大人だと思っているものだが、考えてみれば、云うこともなすことも好きなこともきらいなことも三歳から六歳ぐらいのときと全く本質的には少しもちがっていないことに気がつくのである。